

山上弘道著

日蓮遺文解題集成

興風出版

序

日蓮は鎌倉時代のまさにと真ん中、承久四年（貞応元年＝一二二二）から弘安五年（一二八二）までの六十年を生きた仏教思想家である。

日蓮はその生涯において著述・書状・要文集・写本等々、実に多くの文献を精力的に執筆し残した。それを門下は「聖教」「御筆」「御書」等と称して大切に保管し、あるいは筆写して後世に残すことに務めた。今日「日蓮遺文」として数多く伝来するゆえんである。ところがその一方で、その膨大な日蓮遺文の中には、日蓮滅後に日蓮に仮託して偽作された、いわゆる偽撰遺文が数多く含まれており、それは日蓮の等身大の思想と行動を知る上で、大きな妨げとなる。

本書はそうした状況を踏まえて、第一の目的として、今日伝来する日蓮遺文一編一編に、できうる限り丁寧に考察を加えた上で、真撰・偽撰の分類を目指した。その結果本書で取り上げた五七三編の遺文中、「第Ⅰ類 真撰遺文」が三九八編、「第Ⅱ類 真偽未決遺文」が三〇編、「第Ⅲ類 偽撰遺文」が一四五編という分類結果となった。

まず「第Ⅰ類 真撰遺文」について大まかながら解説すれば、特筆されるのは、日蓮の直筆（真蹟と称される）が数多く現存することである。本書目次に示されている「真蹟」の欄を見れば一目瞭然、首尾が完結する「完存」が一〇六編、部分が現存する「断存」が一三三編、弟子との共著である「共存」が六編、本文は門下が書き、それに日蓮が署名・花押を付した「署名・花押」「花押」と表記しているものが三編で、その総数は二三八編に及び、真撰遺文全体の約六割に及ぶ。

また真蹟は現存しないものの、忠実な模写本（「模本」と表記）が六編、各目録や『延山録外』等によって、曾て

真蹟が存在したことが具体的に記録・確認される遺文、すなわち「曾存」が四四編あり、それを真蹟現存に準ずるものとして数えれば、約七割となる。

そして注目すべきはこれら真蹟現存・曾存遺文は、建長五年（三十二歳）前後に系けられる〔I₂〕『戒法門』から、最晩年の弘安五年三月二十一日に系けられる〔I₃₉₇〕『稻河入道殿御返事』に至るまでほぼ間断なく見られることで、ことに文永五年以降は豊富で、最も少ない文永五年が五編、一番多い文永十二年（建治元年）など二八編を数える。このことは、日蓮の思想形成の状況を、ほぼ真蹟現存・曾存の遺文によって推知できることを意味している。

その真蹟現存・曾存遺文を基準として、写本によって伝来する遺文について、様々な観点から真偽を考察した結果、真撰と判断された遺文は一一〇編にのぼった。かくして本書では真撰遺文は三九八編となったのである。

さて本書が目指したもう一つの課題として、系年の問題があげられる。右の真撰と判断した遺文について、各解題の末尾に「系年」の項を設け、その成立について従来の諸説を紹介した上で、あえてそれにとらわれず、その遺文の内容、および周辺状況等に目を配りながら考察を加えた。その結果従来の系年説を否定し、本書独自の系年を示した遺文が相当数ある。その理由は各項に一々に示しているので、是非とも一読を乞う。

こうした作業によって日蓮の思想が、日蓮自身の勉学の進展のみならず、種々競い起こる周辺の諸状況に対応する中で深化していく様相、すなわち思想的深化の次第階梯が、多少なりとも明らかになったように思う。

たとえば日蓮における真言密教の位置づけを見ると、修学期宝治年間頃の『戒体即身成仏義』においては、出家した清澄寺や遊学した叡山の台密思想が色濃く反映し、密教主体の法華思想が展開されているが、建長五年四月二十八日、法華經至上主義が宣言されて以降は、大日經等を第五法華時に入れつつも、あくまで法華經主体の法義が展開され、その後文永五年閏正月の蒙古使者来朝を契機として、唐土真言三三蔵および東密空海批判が開始されるとともに、文永六年頃に系けられる『小乗小仏要文』では、真言密教は爾前第三時方等部に入れられ、そしてその後文永十年四

月二十五日の『観心本尊抄』にて、台当本迹違目を示し脱天台を明言したことを契機とし、翌文永十一年二・三月頃に系けられる『法華取要抄』の草案『取要抄』から台密批判が開始され、以降徹底した真言批判が展開されるという、次第階梯が看取されるのである。なおこの件に関しては拙著『日蓮の諸宗批判』に詳述しているので参照されたい。

この他にも本尊論・修行論・成道論といった、法義的根幹をなす様々なことがらにおいて、思想的变化・深化の様相が見られるのであり、今後その実相をより明らかにすべく、研究の歩を進めて行く所存である。

次に「第Ⅱ類 真偽未決遺文」であるが、私の気持ちとしては疑義濃厚、すなわち偽撰遺文に近い遺文群である。しかし偽撰遺文に比して、偽撰たる根拠が明確でない遺文をここにおいた。真偽を判別していく上で、ひとまず「要継続審議」の項目があることは重要なことと思う。

次に「第Ⅲ類 偽撰遺文」は一四五編の多きに至った。

偽撰遺文と判断する根拠は種々あるが、内容的に史実との齟齬があることや、教義内容が真撰遺文と著しく乖離していることなどを中心に、使用される用語の問題や、伝来の問題等々にも目を配り、私なりに丁寧を示したつもりである。

また偽撰遺文は単独ではなく、関連させつつ複数作成されている場合も多く、本書では大まかながらそうしたことを念頭において、配列し論じているので、読者諸氏にはそうしたことを意識しつつ読み進めていただければと思う。なお、偽撰遺文の類型的分類については、拙稿「日蓮仮託偽撰遺文の類型的分類試論」(『興風』三四号)に少々詳しく論じているので参照願いたい。

さてこの偽撰遺文群に関して、特に強調しておきたいことがある。右拙論でも強調したことだが、これら偽撰遺文はけっして負の産物とのみ捕らえるべきではない。作成された理由はさまざまあるが、その背景をできうる限り追求し精査することによって、その当時日蓮門下がどのような問題を抱え、どのような議論を展開し、どのようなこと

を指向していたか等々の、貴重なことがらが見えてこよう。そのような観点から「この数年、「日蓮偽撰遺文学」の確立を提言してきたのだが、改めてここに一四五編の偽撰遺文を提示するとともに、今後さらに様々な観点から研究が進められ、「日蓮偽撰遺文学」が進展して行くことを切望する。

以上縷々書き連ねたが、今後の私自身の課題を示して締めくくろうと思う。

まず第一に、本書では日蓮の思想を語る上で、すこぶる重要な位置にある『注法華経』を取り上げていない。その大きな理由として、その成立にはかなりの年月が費やされていることがあげられる。諸説ある中で山中喜八氏の見解が最も整合性があり、それによればおよそ文永十一年頃から弘安元年頃までの成立であるという（『定本注法華経』六四八頁参照）。それ故に、各遺文を系年順に配すという本書の構成上、組み込むことができなかったのである。しかし言わずもがなであるがそれは、日蓮の思想史を語る上で欠くべからざるものであり、今後違った形でしっかりと論じたいと思っている。なお本書では、『天台肝要文集 上』等の要文集を中心に、『注法華経』との密接な共通性・関連性が看取される遺文において、その様相をかなり具体的に示し論じているので参照いただきたい。

次に要文集『本理大綱集等要文』も取り上げることを見合わせた。同要文集は中古天台文献たる『本理大綱集』を、伝教の真撰として掲げているなど注目すべきものであるが、欠失箇所や錯簡の状況が激しく、『対照録』はそれを第一紙から第六紙までの表裏と、第七紙から第十紙までの表裏とに一応整理分別し、前者を建治二年に、後者を文永元年に系けている。その労は多ししなければならないが、なお現存する真蹟を、紙質等も含めて慎重に精査する必要があるように思われる。今後所蔵する池上本門寺のご協力を得て実見精査させていただき、ある程度の結果が得られれば、これも別途報告したいと考えている。

また本書で取り上げなかった多くの断簡類が存する。その数は『昭和定本日蓮聖人遺文』第三巻・第四巻に収められているだけで三九二編に及ぶ。その後も、ことに近年では毎年新出の真蹟断簡が発見されている状況である。本書

ではその内のごく一部を、『137』『念仏破閑連御書』、『150』『持妙女御返事』、『1291』『仏説御書』、『1297』『西山殿御返事』等と命名し紹介しているが、本格的な断簡類の解題集を作成する必要性を痛感している。『昭和定本日蓮聖人遺文』所収の断簡の中には、『日蓮聖人真蹟集成』等で図版が紹介されていない、実見の上真偽の確認が必要なものも相当数あり、その調査も必要である。こもこも含めなかなか簡単な作業ではないと思うが、是非とも本書の続篇として、断簡類の解題集作成を目指したいと思っている。大方のご理解・ご協力をお願いする次第である。

◇

◇

◇

日蓮の全遺文に解題を付すことを志したのは、平成五年発刊の『興風』第八号から執筆を開始した、拙稿「日蓮大聖人の思想」の準備をしていた頃であるから、もう三十年以上の歳月が経過した。私家版としては同論を書き終えた平成十六年頃には、あらかたできていたのであるが、その内に、できうることならばこれを世に問うて、真偽問題や系年の問題を議論するたたき台にでもなればと思うようになった。以来私なりに精進してきたつもりであるが、やればやるほど奥が深く、月日はあつという間に過ぎてしまった。まだまだ未成熟であることは十分承知しているが、一端この辺で区切りを付けて出版することを決意した。日蓮遺文研究に一分なりとも役立つことがあれば幸いである。最後に、本書執筆に際しては、これまで多くの先達が残して下さった業績を参考とさせていただいている。その学恩に心より感謝申し上げたい。

また身延文庫・立正安国会・千葉県保田妙本寺には、資料図版の掲載許可をいただいた。記して深謝申し上げます。また身延山大学図書館・立正大学図書館・日蓮教学研究所・日蓮仏教研究所他、一々にご芳名はあげ得ないが、多くの諸寺・諸機関にて、貴重な資料を調査閲覧させていただいた。そのご協力なくして本書は成り立っていない。深く御礼申し上げます。

また興風談所諸氏には、さまざまなアドバイス、さらにレイアウトから校正に至るまで尽力していただいた。深く

感謝したい。

本書が、長きにわたり物心両面で支えて下さっている方々への、一分御恩に報いるものとなれば幸いである。またすでに物故された方も多くおられる。謹んでその御霊前に本書を捧げる次第である。

令和五年十月十三日

朝霞精舎にて

興風学徒

山上弘道

凡例

一、本書の目的と収録遺文

本書は日蓮遺文の解題集である。その目的は第一に真撰遺文と偽撰遺文の峻別であり、第二に真撰と判断した遺文の系年の特定である。日蓮の思想を知る上で最も重要な基本作業と考える。

本書で取り上げる遺文は、基本的に『定遺』に収録されるものであるが、次項「本書の構成」で示すように、『定遺』未収録の、近時発見された真撰遺文、『秘書要文』等の各要文集、『延山録外』等の資料から見出された遺文等を収録している。また『定遺』の書名を改めたものがあり、その場合『定遺』書名は、巻頭の目次、および本論各項目書名の下に示し、改名の理由は解題に示している。

二、本書の構成

本書の構成は「第I類 真撰遺文」「第II類 真偽未決遺文」「第III類 偽撰遺文」の三部構成となっている。また末尾に「付録」を参考資料として付している。

(一)「第I類 真撰遺文」

ここでは真蹟完存・断存・曾存の遺文はもとより、諸状況から真撰と判断した三九八編を系年順に収録している。その中には『定遺』に未収録の遺文、また『定遺』が別の遺文として収録するものを、合体し一つの遺文として収録したものが左のごとく存する。

(イ)『定遺』未収録の遺文

①新出真蹟遺文

『I 7』『白木御消息』・『I 310』『浄行一分御書』・『I 311』『大音声御書』・『I 317』『故三位房御書』

②要文集を遺文として収録したもの

『I 11』『秘書要文』・『I 43』『迦葉付属事』・『I 44』『破禅要文』・『I 55』『双紙要文』・『I 56』『天台肝要文集上』・『I 160』『行忍手沢要文集』

③日乾の真蹟模写本

『I 198』『四条金吾宛御経送状』・『I 210』『一代五時図』(身延曾存本)

④『延山録外』所収身延曾存遺文

『I 149』『高橋入道臨終事』・『I 352』『中務左衛門尉殿御書』

⑤『日境本録外』所収身延曾存遺文

『I 70』『爾前無得道御書』・『I 190』『佐渡房御書』

⑥関連する断簡を複数纏めて遺文としたもの

『I 37』『念仏破関連御書』・『I 154』『本門大法御書』・『I 236』『三論宗御書』・『I 291』『仏説御書』・『I 299』『阿耆多王御書』

⑦その他

『I 39』『実相寺衆徒愁状』・『I 61』『三種教相要文』(略本)・『I 150』『持妙女御前御返事』(断簡一九八)・『I 155』『破真言三部経御書』(含「断簡二二二」)・『I 320』『治部殿御返事』・『I 329』『南条平七郎殿御返事』

(ロ)『定遺』が別の遺文として収録するものを合体させた遺文

○『I 105』『土木殿御返事』は、定遺番号131『土木殿御返事』と414『越州嫡男並妻尼事』を前後一書として収録している。

○『I 163』『高橋殿後家尼御前御返事』は、定遺番号99『女人某御

返事』、323『衣食御書』、その他の断簡を一書として収録する。

○〔I 170〕『木絵二像開眼之事』では、『定遺』「断簡二四〇」を『木絵二像之御書之切』として、付属して収録する。

○〔I 296〕『陰徳陽報御書』は、定遺番号313『不孝御書』と331『陰徳陽報御書』を一書として収録する。

○〔I 297〕『西山殿御返事』は、定遺番号320『師子王御書』とその他五篇の断簡を一書として収録する。

○〔I 307〕『大尼御前御返事』は、定遺番号322『大学三郎御書』382『大尼御前御返事』「断簡一九七」を一書として収録する。

○〔I 360〕『南条殿御返事』は、定遺番号391『南条殿御返事』と406『上野殿御返事』、その他二編の断簡を一書として収録する。

○〔I 386〕『富城入道殿御返事』+『老病御書』は、定遺番号413『富城入道殿御返事』と417『老病御書』を一書として収録する。

○〔I 133〕『曾谷入道殿許御書』では、定遺番号155『合戦在眼前御書』を独立した遺文ではなく、『曾谷入道殿許御書』の草案として、当該解題内で紹介している。

(二)「第Ⅱ類 真偽未決遺文」

ここでは、疑義はあるものの偽撰遺文とは断定できぬものを、真偽未決遺文として三〇編収録している。

(三)「第Ⅲ類 偽撰遺文」

ここでは偽撰遺文と判断した一四五編を収録している。

まず「偽撰遺文」として〔Ⅲ 1〕『立正観抄』から〔Ⅲ 127〕『鎌隼問答』まで一二七編を収録している。

次に「偽筆遺文」として日蓮の字体に似せて偽作されたもの二編

を紹介している。この二編は『定遺』に収録されるもので、それが真撰遺文ではないことを確認するために取り上げている。もとより偽筆遺文はこの他に数多く存するが、ここではそれら偽筆遺文を紹介することを目的としない。

次に「口伝・相伝類」として、日蓮が弟子に口伝したとの想定、弟子が日蓮の講義を筆録相伝したとの想定で偽作されたもの、都合一〇編を収録している。

次に「門下作成文書・後日蓮遺文化」として、門下が自家用に作成した文書が、後世日蓮遺文として伝来したと想定されるもの六編を収録している。

なお、計一四五編の中で、『定遺』未収録分は、〔Ⅲ 91〕『曾谷殿御返事』・〔Ⅲ 122〕『同地獄御書』・〔Ⅲ 123〕『小八幡抄』・〔Ⅲ 127〕『鎌隼問答』・〔Ⅲ 134〕『法華本門宗血脈相承事』・〔Ⅲ 135〕『具膳本種正法実義本迹勝劣正伝』・〔Ⅲ 136〕『産湯相承事』・〔Ⅲ 137〕『御本尊七箇之相承』・〔Ⅲ 138〕『教化弘教七箇口決大事』・〔Ⅲ 139〕『上行所伝三大秘法口決』・〔Ⅲ 145〕『寿量品文底大事』の一一編である。

(四)付録

次に右解題集の後に、付録として「遺文目録」「書状花押集」「偽撰遺文に頻出する用語」の三項目がある。

(イ)遺文目録

遺文目録として、中山法華経寺関係の目録、身延山久遠寺関係の目録、録内御書関係の目録、録外御書関係の目録、編年御書目録を左のごとく紹介している。なおここでは略名にて示す。具名は後に一括して紹介しているので参照されたい。また各目録の冒

頭には、その成立など簡略ながら解説を付している。

①「中山法華経寺関係」としては、『日常目録』『日祐目録』『日侘目録』『日典目録』『日班目録』『日窓目録』『日亮目録』を翻刻紹介している。

②「一身延山久遠寺関係」としては、『日意目録』『日乾目録』『日遠目録』『日奠目録』『日筵目録』『日亨目録』『延山録外目録』を翻刻紹介している。

③「録内御書関係」としては、その基本となる『御書目録日記之事』の目録、『平賀本御書目録』『刊本録内御書目録』を収録している。『平賀本』は必ずしも録内御書とはいえないが、それに準ずるものとして収録した。また録内御書は「本隆寺本」「妙伝寺本」等多く存するが、その集大成として『刊本録内御書』を収録した。

④「録外御書関係」としては、『朝師御自筆録外御書分』『日健本』『本満寺録外御書』『三宝山録外御書』『他受用御書』『刊本録外御書』の目録を収録した。

⑤「編年御書目録」としては、『日奥目録』『境妙庵目録』『日諦目録』『日明目録』『日騰目録』を収録した。

(ロ) 書状花押集

ここでは【書状花押集】として、日蓮書状の花押を系年順に一一六点紹介している。ついで【付録】があり、まず「一、曼茶羅本尊花押に準ずるもの」として、通常の書状花押とは異なる、むしろ曼茶羅本尊花押に近い『秀句十勝抄』『一代五時鶏図』(本因寺本)の花押と、参考として類似する『真蹟集成』五三番本尊の花押を示している。次に「二、系年が特定できない断簡花押」では、花押の重要部分が削損していたり、写真が不鮮明であったり、本文がない等の理由で系年が特定できないもの六点を紹介している。次に「三、

模写・形本の花押」として五点を紹介している。

(ハ) 偽撰遺文に頻出する用語

ここでは本書にて偽撰遺文と判断した一四五編の中に頻出し、かつ真撰遺文と判断した三九八編には全く見られない特徴的用语、「無作 三身」(無作と三身を含む用語。以下同)、「本覚」「当体 蓮華」「一心三観」「授(受) 職灌頂」「如説修行」「日蓮 相承」「日蓮が弟子檀那」「闕減なし」「相構へ」「自受用」について、その引文状況を網羅的に紹介し、末尾にそれらの用語について、若干の解説を加えている。

三、各遺文解題の構成

(一) 各項目冒頭の遺文番号・書名・系年・对告者、「遺文集」

「注釈書」について

【例】

I類 正 1

戒体即身成仏義

宝治年間(二四七〜四九頃)二六〇二八歳頃 「对告者 不在(著述)

【遺文集】朝四二〇(4) 平賀一四 刊内三九一 遺録一 一 編制一定遺一 新定一
【注釈書】書鈔二六〇二 啓蒙下 876上 伏老八五四 拾遺 445 平譜一 一

内の上段「I類」とあるは、本解題集の番号で、ここでは第I類に収録される通番号一番の遺文という意味である。第II類の場合「II類」等と、第III類は「III類」等と記している。

下段「正1」とは、『定遺』番号で、『戒体即身成仏義』は「第一輯 正篇」の通番号一番であることを示す。同じく「続1」とあれ

ば『定遺』「第二輯 続篇」の一番、「図一」とあれば『定遺』「第三輯 図録」の一番、「講一」とあれば『定遺』「第五輯 講記」の一番の意である。下段が空白の場合は『定遺』未収録である。

次にその下には「戒体かいたい即身いそくしん成なり仏ぶつ義ぎ」と書名を記しているが、その殆んどは『定遺』の書名を使用し、また振り仮名を付している。

ただし内容等から本書にて改名したのも相当数あり、その場合は書名下に、「定遺」 として『定遺』の書名を付し、改名の理由は当該項目の解題に示している。

次に「宝治年間（二四七〜四九）頃二六〜二八歳頃「**対告者**不在（著述）」とあるのは、遺文の成立年次と日蓮の年齢、および対告者を示している。

次に「**遺文集**」**朝内**二〇(4) **平賀**一四 **刊内**三九一……等とあるのは、当該遺文を収録する各遺文集の書目と巻数・丁数・頁数等を示している。書目略号の具名は左のとおりである。

朝内 〓 日朝本録内御書（正本。二〇冊本・六冊本。身延文庫蔵）

平賀 〓 日意本録内御書（日遊写本。平賀本土寺蔵）

刊内 〓 『刊本録内御書』（宝曆修補版録内御書）

朝外 〓 日朝本録外御書（正本。一〇冊本。身延文庫蔵）

満外 〓 『本満寺録外御書』（影印版。本山本満寺。昭和四二年）

三宝 〓 『三宝寺録外御書』（写本。東京大宣寺蔵）

他受 〓 『他受用御書』（刊本。慶安二年。宗全開版）

刊外 〓 『刊本録外御書』（寛文版録外御書。法華宗門書堂）

遺録 〓 『高祖遺文録』（小川泰堂編。明治一三年）

縮刷 〓 『盡良閣版 日蓮聖人遺文』（加藤文雅編。明治三七年）

定遺 〓 『昭和定本 日蓮聖人遺文』（日蓮教学研究所。昭和二七年）

新定 〓 『昭和新定 日蓮大聖人御書』（大石寺。昭和四一年）

対録 〓 『日蓮大聖人御真蹟対照録』（立正安国会。昭和四二年）

集成 〓 『日蓮聖人真蹟集成』（法藏館。昭和五一年）

鎌遺 〓 『鎌倉遺文』（竹内理三編。昭和五〇年）

日 〓 『日蓮宗宗学全書』（日蓮教学研究所。昭和三四年）

富 〓 『富士宗学要集』（堀日亨編。昭和三十一年）

次に「**註釈書**」**書鈔**一六〇二 **啓蒙**下 876上 **扶老**八五四……等とあるのは、各注釈書の巻数・頁数を示している。書目略号の具名は左のごとくである。

書鈔 〓 『御書鈔』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五一年）

書註 〓 『御書註』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五二年）

啓蒙 〓 『録内啓蒙』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五〇年）

扶老 〓 『録内扶老』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五二年）

拾遺 〓 『録内拾遺』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五一年）

考文 〓 『録外考文』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五〇年）

微考 〓 『録外微考』（本満寺版『日蓮宗全書』。昭和五〇年）

龍講 〓 『日蓮聖人御遺文講義』（龍吟社。昭和七年）

平講 〓 『日蓮聖人遺文全集講義』（ピタカ。復刻版。昭和五二年）

春秋 〓 『日蓮聖人全集』（春秋社。平成四年）

(二) 本文について

(イ) 《解題》

各項目の解題本文は、まず《解題》として、当該遺文の伝来状況、および大まかな内容、そして真偽について論じている。なお文中に示した氏名については敬称を略している。

(ロ) 《系年》

「第Ⅰ類 真撰遺文」においては《系年》の項を設け、当該遺文の系年に関する情報、従来の系年説等を示し、その上で本書としての見解を示している。

「第Ⅱ類 真偽未決遺文」でも、参考ながら《系年》の項を設け、従来の系年説等を示し、ある程度推定できるものはそれを示し、推定できないものは「系年不明」としている。なお収録の順番は、真偽未決遺文故に系年順とせず、『定遺』番号順としている。

「第Ⅲ類 偽撰遺文」は《系年》の項目を設けていない。ただし参考として、当該偽撰遺文が系年を示している場合、また内容的に系年を想定して作成されている場合は、解題中にそれを示している。

四、本書に使用されている資料略称一覧

『日常目録』……………	「常修院本尊聖教録」
『日祐目録』……………	「本尊聖教録」
『日俛目録』……………	「日俛御手前二有之御霊宝」
『日典目録』……………	「中山霊宝之注文」
『日珖目録』……………	「正中山御霊宝目録」
『日窓目録』……………	「正中山法華経寺御霊宝之惣目録」
『日亮目録』……………	「正中山本妙法華経寺御霊宝目録録鑑」
『日意目録』……………	「大聖人御筆目録」
『日乾目録』……………	「身延山久遠寺御霊宝記録」
『日遠目録』……………	「身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第」
『日奠目録』……………	「甲州身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第」
『日筵目録』……………	「御書並聖教目録」
『日亨目録』……………	「西土蔵宝物録」
『日奥目録』……………	「御書新目録」

『境妙庵目録』……………「境妙庵御書目録」

『日諦目録』……………「祖書目次」

『日明目録』……………「新撰校正祖書目次」

『日騰目録』……………「新定祖書目録攷異」

『信伝本』……………信伝（北山本門寺僧）が、応永十五年（一四〇八）

に寂仙房日澄写本を筆写した、富木常忍宛書状を中心とする十一通の遺文集である。

『日朝本』……………「日朝録内御書」（『御書目録日記之事』に準ず）。

なお現在身延文庫に所蔵される日朝「録内合本」の「二十冊本」「六冊本」は、「録外御書」が含まれるなどいわゆる「録内御書」とは全く構成が異なる。

『日朝本録外』……………「日朝録外御書」（日意「朝師御自筆録外御書分」）。

なお現在身延文庫に所蔵される日朝「録外合本」十冊は、「録内御書」が含まれており「朝師御自筆録外御書分」とは構成が異なる。

『平賀本』……………平賀本土寺日意本

『日健本』……………弘経寺日健「録外御書」

『日境本録外』……………身延山久遠寺二十七世日境編集

『縮刷遺文』……………『霊良閣版 日蓮聖人遺文』

『定遺』……………『昭和定本 日蓮聖人遺文』

『新定』……………『昭和定本 日蓮大聖人御書』

『対照録』……………『日蓮大聖人御真蹟対照録』

『真蹟集成』……………『日蓮聖人真蹟集成』

『日宗全』……………『日蓮宗宗学全書』

『興全』……………『日興上人全集』

『富要』……………『富士宗学要集』

- 『大正藏』……………『大正新脩大藏經』
- 『卍統藏』……………『卍統藏經』
- 『仏全』……………新編『大日本仏教全書』
- 『伝全』……………『伝教大師全集』
- 『恵全』……………『恵心僧都全集』
- 『撰論』……………無著『撰大乘論』
- 『地論』……………世親『十地論』
- 『大論』……………竜樹『大智度論』
- 『玄義』……………智顓『法華玄義』
- 『文句』……………智顓『法華文句』
- 『止観』……………智顓『摩訶止観』
- 『釈籤』……………湛然『法華玄義釈籤』
- 『文句記』……………湛然『法華文句記』
- 『弘決』……………湛然『摩訶止観輔行伝弘決』
- 『五百問論』……………湛然『法華五百問論』
- 『補注』……………從義『天台三大部補注』
- 『選択集』……………法然『選択本願念仏集』
- 『三大部私記』……………証真『法華三大部私記』
- 『啓運抄』……………日澄『法華啓運抄』

○興風談所製作の電子版資料集『統合システム』について

本書にてたとえば、「円明日澄『啓運抄』巻二（文献システム）No. 186849」と記されている「文献システム」とは、興風談所製作の電子版資料集『統合システム』中の「日蓮門下通用文献システム」の略称で、「No.」以下の数字は同システム本文No.のことである。

◎第I類 真撰遺文目次

※真蹟欄の「完存」は真蹟が首尾完結する遺文。「断存」は真蹟が部分的に現存する遺文。「共存」は真蹟と門下筆で構成される遺文。「署名・花押」「花押」は本文が門下、署名や花押が真蹟の遺文。「曾存」は曾て真蹟が存在したことが確認される遺文。「模本」は真蹟模写本が存する遺文。

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
一	戒体即身成仏義		宝治年間頃	断存	正一	一	一
二	戒法門		建長五年前後	断存	統一	一九五	三
三	色心二法抄		建長五年前後	断存	統一	一九五	三
四	戒之事		建長五年前後 建長末年 建長五年前後	断存	統一	一九五	三
五	五行事		建長五年前後	断存	統一	一九五	三
六	不動・愛染感見記		建長六・六・二五	断存	正三	一六	五
七	白木御消息		建長八年(康元)	断存	正五	二五	九
八	土木殿御返事		建長八年(康元)	断存	正五	二五	九
九	土木殿御返事	富木殿御返事	建長八年(康元)	断存	正五	二五	九
一〇	とき殿御返事	富木殿御返事	康元元・二・九	断存	正二	一五	二
一一	秘書要文		建長八年(康元)	断存	正一	一五	二
一二	六因四縁事		建長八年(康元)	断存	正一	一五	二
一三	四教略名目		建長八年(康元)	断存	正一	一五	二
一四	一代聖教大意		建長八年(康元)	断存	正一	一五	二
一五	守護国家論		正嘉三・一月二日	曾存	正五	二五	九
一六	爾前一乘菩薩不作仏事		正元元年頃	曾存	正七	三五	三
一七	六凡四聖御書		正元元年頃	曾存	正七	三五	三
一八	念仏者令追放宣旨御教書集列五篇勸文状		正元二年初頭頃	断存	正七	三五	三
一九	災難興起由来		正元二・二月上旬	断存	正八	三五	三
二〇	像法決疑経等要文		正元二・二月	断存	正八	三五	三
二一	災難対治抄		正元二・二月下旬頃	断存	正八	三五	三
二二	十法界明因果抄		文応元・四・二二	断存	正三	一七	四
二三	唱法華題目抄		文応元・五・二八	断存	正三	一七	四

二四	立正安国論		文応元七月上旬頃	断存	正四	二〇	四
二五	武蔵公御房御消息	武蔵殿御消息	文応元・七・二七	曾存	正三	一七	四
二六	十住毘婆娑論尋出御書		文応元・一〇・二四	曾存	正四	一七	四
二七	後五百歳合文		弘長二年	断存	正三	一七	四
二八	論談敵対御書		弘長二年	断存	正三	一七	四
二九	水月御書		文永元・四・一七	断存	正四	二〇	五
三〇	題目弥陀名号勝劣事		文永元・四・一七	断存	正四	二〇	五
三一	当世念仏者無間地獄事		文永元・九・二二	断存	正七	二五	六
三二	南条兵衛七郎殿御書		文永元・二・二三	断存	正六	二二	六
三三	薬王品得意抄		文永二年頃	断存	正四	二〇	五
三四	女人往生抄		文永二年頃	曾存	正四	二〇	五
三五	法華経題目抄	法華題目抄	文永三・一・一六	断存	正四	二〇	五
三六	衣座御書		文永三年頃	断存	正四	二〇	五
三七	念仏破関連御書		文永三年	断存	正四	二〇	五
三八	安国論御勸由来		文永五・四・五	断存	正四	二〇	五
三九	実相寺衆徒愁状		文永五年八月	断存	正四	二〇	五
四〇	宿屋入道許御状	宿屋入道再御状	文永五・八・二二	断存	正五	二一	六
四一	愚札返報要請御状		文永五年九月以降	断存	正五	二一	六
四二	安国論副状		文永五・六年	曾存	正四	二〇	五
四三	迦葉付属事		文永五・六年	断存	正四	二〇	五
四四	破禅要文		文永五・六年	断存	正四	二〇	五
四五	御輿振御書		文永六・二・二	断存	正六	二二	六
四六	問注得意抄		文永六・五・九	断存	正六	二二	六
四七	安国論書写事	安国論送状	文永六・五・二六	断存	正六	二二	六

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
四八	土木殿御消息	富木殿御消息	文永六・六七	完存	正六七	四〇	二〇七
四九	御衣並単衣御書		文永六・九・二八	完存	正一五	二二	二〇
五〇	法衣書		文永六・九・二八	完存	正九八	一六	二〇
五一	法華捨身念願抄	金吾殿御返事	文永六・二・二八	断存	正三	四	二二
五二	安国論奥書		文永六・二・二八	完存	正六九	四二	二二
五三	止観第五之事御消息	上野殿母尼御前御書	文永六・二・二二	完存	正七四	四九	二五
五四	故最明寺入道見参御書		文永六年頃	断存	正七	四	二六
五五	双紙要文		文永六年頃	共存	断四七	二九	二七
五六	天台肝要文集上		文永六年頃	共存	断四七	二九	二七
五七	小乘小仏要文		文永六年頃	完存	断四七	三九	二七
五八	十章抄		文永六年頃	断存	正八	四八	二七
五九	三三教		文永六年頃	断存	断三	三三	二五
六〇	三種教相		文永六年頃	断存	断七	三九	二五
六一	三種教相要文(略本)		文永六年頃	断存	断七	三九	二五
六二	聖密房御書		文永六・七年頃	断存	正四八	八〇	二五
六三	别当御房御返事		文永六・七年頃	断存	正四九	八七	二五
六四	法門可被申様之事		文永七年八月以降	断存	正七	四	二五
六五	真間釈迦仏御供養逐状		文永七・九・二六	断存	正三	四七	二二
六六	星名五郎太郎殿御返事		文永七・二・二五	断存	正四七	四四	二二
六七	善無畏抄		文永七年	断存	正四	四八	二二
六八	善無畏三蔵抄		文永七年	断存	正四	四八	二二
六九	其中衆生御書		文永七年頃	断存	正七	四	二二
七〇	爾前無得道御書		文永七年頃	断存	正三九	七五	二二
七一	御衣布給候御返事		文永八年の佐渡 流罪以前	断存	正四	七五	二二

七二	一代五時図(広本)		文永八年の佐渡 流罪以前	完存	四九	三八	一七
七三	行敏御返事		文永八・七・一三	断存	正八	四	二二
七四	行敏訴状御会通		文永八年八月 初旬頃	断存	正八	四	二二
七五	小乘大乘分別抄		文永八年佐渡 流罪直前頃	断存	正三	四	二二
七六	一昨日御書		文永八・九・二二	断存	正八	四	二二
七七	土木殿御返事		文永八・九・一五	断存	正八	四	二二
七八	五人土籠御書		文永八・一〇・三	断存	正八	四	二二
七九	転重軽受法門		文永八・一〇・五	断存	正八	四	二二
八〇	寺泊御書		文永八・一〇・三	断存	正八	四	二二
八一	法華浄土問答抄		文永九・一・一七	断存	正八	四	二二
八二	八宗違目抄		文永九年開目抄前後	断存	正八	四	二二
八三	開目抄		文永九年二月	断存	正八	四	二二
八四	佐渡御書		文永九・三・二〇	断存	正八	四	二二
八五	同生同名御書		文永九年三月下旬頃	断存	正八	四	二二
八六	土木殿御返事	富木殿御返事	文永九・四・一〇	断存	正八	四	二二
八七	諸宗違目事	真言諸宗違目	文永九・五・五	断存	正八	四	二二
八八	日妙聖人御書		文永九・五・二六	断存	正八	四	二二
八九	祈禱抄		文永九年後半	断存	正八	四	二二
九〇	四条金吾殿御返事		文永九・九・八	断存	正八	四	二二
九一	夢想御書		文永九年一〇月 末頃	断存	正八	四	二二
九二	顯勝法抄		文永九年頃	断存	正八	四	二二
九三	華嚴法相三論天台 等元祖事		文永九年頃	断存	正八	四	二二
九四	一代五時圖(西山本) 断簡二五〇		文永九年頃	断存	正八	四	二二
九五	浄土九品之事		文永九年頃	断存	正八	四	二二
九六	和漢王代記		文永九年頃	断存	正八	四	二二

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
九七	如来滅後五百歳始観心本尊抄		文永一〇・四二五	完存	正二八	七二	二四二
九八	観心本尊抄副状		文永一〇・四二六	完存	正二九	七三	二四七
九九	妙一尼御返事		文永一〇・四二六	完存	正三〇	七三	二四八
一〇〇	呵責謗法滅罪抄		文永一〇年五月頃		正三七	七九	二五〇
一〇一	顯仏未来記		文永一〇・四五・二	曾存	正三五	七九	二五三
一〇二	土木殿御返事	富木殿御返事	文永一〇・七・六	完存	正三六	七九	二五五
一〇三	南部六郎三郎殿御返事	波木井三郎殿御返事	文永一〇・八・三		正三七	七九	二五五
一〇四	妙一尼御前御書	弁殿・尼御前御書	文永一〇・九・一九	完存	正三九	七九	二五八
一〇五	土木殿御返事	越州辨男並妻尼事 土木殿御返事	文永一〇・一・二三	完存	正三四 八八九	七九	二五八
一〇六	乙御前母御書		文永一〇・一・二三	断存	正三三	七九	二六〇
一〇七	正当此時御書		文永一〇年後期	模本	正三三	七九	二六一
一〇八	大果報御書		文永一〇・二・頃	曾存	正三三	七九	二六三
一〇九	妙法曼陀羅供養事		文永一〇年末頃		正二七	六九	二六五
一一〇	一代五時鶏図(妙覺寺本)		文永一〇年頃	断存	図三	三五	二六六
一一一	一代五時鶏図		文永一一年初頭頃		図六	二四〇	二六八
一一二	法華行者值難事		文永一一年初頭	完存	正四〇	七九	二六九
一一三	真言宗行調伏秘法 還著於本人事		文永一一年初頭 三月赦免以前		正二三	六八	二七一
一一四	未驚天聰御書		文永一一年四月中旬	断存	正四三	六八	二七三
一一五	白米和布御書		文永一一年四月初頃	完存	正四四	二二三	二七七
一一六	富木殿御書		文永一一年五・一七	完存	正四四	二二三	二七九
一一七	上野殿御返事		文永一一年七・二六	完存	正四七	八九	二八〇
一一八	弁殿御消息		文永一一年七・二六	完存	正四九	八八	二八二
一一九	九郎太郎殿御返事		文永一一年七月頃	断存	正三七	八〇	二八四
一二〇	主君耳入此法門 免与同罪事		文永一一年九・二六		正三五	八三	二八五
一二一	法華取要抄		文永一一年一初旬	完存	正四三	八〇	二八六

一二二	上野殿御返事		文永一一年一・二一		正三五	八五	二九〇
一二三	曾谷入道殿御書		文永一一年二・二五	断存	正四六	八六	二九二
一二四	顯立正意抄		文永一一年二・二五		正四六	八六	二九三
一二五	強仁状御返事		文永一一年二・二六	断存	正四八	八六	二九四
一二六	仏眼御書		文永一一年末頃	断存	正四九	八六	二九六
一二七	十宗事		文永一一年頃	曾存	図六	二九六	二九八
一二八	清澄寺大衆中		文永一一年一・二一	曾存	正四五	二九六	二九九
一二九	春之祝御書		文永一一年一月下旬	断存	正四六	八六	三〇〇
一三〇	富木殿御返事		文永一一年二・二七	完存	正四六	八六	三〇三
一三一	可延定業御書		文永一一年二・二七	完存	正四六	八六	三〇五
一三二	新尼御前御返事		文永一一年二・二六	断存	正四六	八六	三〇六
一三三	曾谷入道殿許御書		文永一一年二・三〇	完存	正四七	八六	三〇八
一三四	弁殿御消息		文永一一年二・三〇	完存	正四五	八六	三〇九
一三五	弁殿御消息追伸	富木尼御前御返事	文永一一年二・三〇	完存	正四五	八六	三一〇
一三六	聖人知三世事		文永一一年二・四月 改元前後	完存	正四七	八六	三一三
一三七	妙一尼御前御消息		建治元年五月	完存	正四八	八六	三一四
一三八	国府尼御前御書		建治元年六・一六	完存	正四八	八六	三一五
一三九	浄蓮房御書		建治元年六・二七	完存	正四八	八六	三一六
一四〇	南条殿御返事		建治元年七・二	断存	正四五	二〇九	三一七
一四一	大学三郎殿御書		建治元年七・二	完存	正四八	二〇九	三一八
一四二	高橋入道殿御返事		建治元年七・二二	断存	正四七	二〇九	三二〇
一四三	高橋殿女房御返事	高橋殿御返事	建治元年七・二六		正四九	二〇九	三二二
一四四	乙御前御消息		建治元年八・四		正四九	二〇九	三二四
一四五	妙心尼御前御返事		建治元年八・二六	曾存	正四九	二〇九	三二五
一四六	妙心尼御前御返事		建治元年八・二五		正四九	二〇九	三二七
一四七	单衣抄		建治元年八月		正四九	二〇九	三二九

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
一四八	蒙古使御書		建治元年九月中旬		正二九	二二三	三〇四
一四九	高橋入道臨終事		建治元年(〇)月中旬	曾存			三〇六
一五〇	持妙女御前御返事		建治元・二・一・五	断存	断一九八	二五〇	三〇六
一五一	法蓮抄		建治元年後期頃	断存	正二五	二九	三〇七
一五二	王日殿御返事		建治元年末頃	断存	正九七	二八五	三〇一
一五三	五十二位図		建治元年末頃	断存	図三	三三三	三〇二
一五四	本門大法御書		建治元年末頃	断存	多数	多数	三〇三
一五五	破真言三部經御書		建治元年末頃	断存	断三三	三九〇	三〇八
一五六	瑞相御書		建治元年頃	曾存	正二六	八七	三〇五
一五七	大善大惡御書		建治元年頃	断存	正二七	八七	三〇五
一五八	日月之事		建治元年頃	完存	図四	三三〇	三〇五
一五九	根露枝枯御書		建治元年頃	曾存	統五	三三九	三〇五
一六〇	行忍手沢要文集	行忍抄	建治元年頃 二年初頭	共存			三〇五
一六一	撰時抄		建治元年頃	断存	正二八	三〇三	三〇六
一六二	減劫御書	智恵亡国御書	建治二年初頭	断存	正三〇	二二	三〇七
一六三	高橋殿後家尼御前御返事	衣食御書 女人某御返事	建治二年初頭	断存	多数	多数	三〇八
一六四	南条殿御返事		建治二・一・一・九	断存	正二〇	二七	三〇八
一六五	四条金吾殿女房御返事		建治二・一・二・七	断存	正二六	八五	三〇八
一六六	松野殿御消息		建治二・一・二・七	断存	正二七	二二	三〇八
一六七	持妙尼御前御返事	上野殿御返事	建治二・二・二・五	断存	正二七	二二	三〇八
一六八	種種御振舞御書		建治二・二・二・五	曾存	正二七	二二	三〇八
一六九	南条殿御返事		建治二・三・一・八	断存	正二〇	二四	三〇八
一七〇	木絵一像開眼之事 本絵一像之御書之切		建治二・三・一・八	断存	正二〇	二四	三〇八
一七一	下方他方旧住菩薩事		建治二・三・一・八	断存	正二〇	二四	三〇八

一七二	富木尼御前御書		建治二・三・二・七	完存	正二二	二四	三〇四
一七三	忘持經事		建治二・三・三・〇	完存	正二二	二五	三〇五
一七四	光日尼御前御書	光日房御書	建治二年三月	曾存	正三三	二五	三〇七
一七五	妙密上人御消息		建治二・三・三・五	断存	正二四	二六	三〇二
一七六	南条殿御返事		建治二・四・三・四	断存	正二五	二七	三〇三
一七七	こう入道殿御返事		建治二・四・一・二	断存	正二七	九三	三〇四
一七八	王舍城事		建治二・四・一・二	曾存	正二七	九五	三〇五
一七九	兄弟抄		建治二年四月	断存	正二七	九八	三〇七
一八〇	持妙尼御前御返事	妙心尼御前御返事	建治二・五・四	断存	正二六	二四七	三〇二
一八一	一谷入道女房御書	一谷入道御書	建治二・五・八	断存	正二七	九九	三〇三
一八二	持妙尼御前御返事	南条殿女房御返事	建治二・五・二・四	断存	正二八	二五〇	三〇四
一八三	随意御書		建治二年五月頃	断存	正三二	二六〇	三〇七
一八四	春表御書		建治二年五月末	模本	正二八	二八〇	三〇九
一八五	三三藏祈雨事		建治二・六・二・一	断存	正二八	二八五	三〇〇
一八六	四条金吾积迎仏供養事		建治二・七・一・五	断存	正三〇	二八二	三〇三
一八七	覚性房御返事		建治二・七・一・八	断存	正三二	二八九	三〇四
一八八	報恩抄		建治二・七・二・二	断存	正三三	二九二	三〇五
一八九	弁殿御消息		建治二・七・二・二	断存	正三三	二九二	三〇五
一九〇	佐渡房御書		建治二・七・二・二	曾存	正三三	二九二	三〇五
一九一	報恩抄送文		建治二・七・二・六	断存	正三三	二九二	三〇五
一九二	破良観等御書		建治二年七月頃	曾存	正三三	二九二	三〇五
一九三	道妙禅門御書		建治二・八・一・〇	断存	正三七	二九	三〇五
一九四	直垂御書		建治二年八月頃	断存	正三七	二九	三〇五
一九五	四条金吾殿御返事		建治二・九・六	断存	正三六	二九	三〇五
一九六	九郎太郎殿御返事		建治二・九・一・五	断存	正三九	二六〇	三〇七

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
一九七	石本日仲聖人御返事		建治二・九・二〇	曾存	正三三	三九	四八
一九八	四条金吾宛御経送状		建治二年晩秋 初冬	模本			四九
一九九	持妙尼御前御返事		建治二・一・二		正三九	七	四九
二〇〇	大田入道殿御返事		建治二・一・三	断存	正三九	二五	四九
二〇一	尊靈御菩提御書		建治二年一月頃	断存	正三九	二九	四九
二〇二	法華經二十重勝諸教義		建治二・一・三		正三七	二六	四九
二〇三	西山殿御返事		建治二・一・三	曾存	正三六	二九	四九
二〇四	松野殿御返事		建治二・一・九		正三三	二六	四九
二〇五	道場神守護事		建治二・一・三	完存	正三三	二七	四九
二〇六	本尊供養御書		建治二年二月		正三三	二六	四九
二〇七	食物三徳御書		建治二年末頃	断存	正三九	二七	四九
二〇八	一代五時図(略本)		建治二年	完存	図三	三九	四九
二〇九	一代五時鶏図(本満寺本)		建治二年	完存	図四	三六	四九
二一〇	一代五時図(身延曾存本)		建治二年	模本			四九
二一一	一代勝劣諸師異解事		建治二年	完存	図四	二四	四九
二一二	惠日天照御書		建治二年頃	曾存	続五	三九	四九
二二三	除病御書		建治二年末 三年初頭	曾存	正三〇	二二	四九
二二四	四条金吾殿御返事		建治二年末	断存	正三〇	二〇	四九
二二五	上野殿御返事		建治三・一・三	模本	正四四	二〇	四九
二二六	大田殿許御書		建治三・一・二四	完存	正三九	一五	四九
二二七	兵衛志殿女房御書		建治三・三・二	完存	正四〇	二五	四九
二二八	六郎次郎殿御返事		建治三・三・九		正四一	二五	四九
二二九	四信五品抄		建治三年四月早々	完存	正四二	二五	四九
二三〇	乘明聖人御返事		建治三・四・二二	完存	正四三	三〇	四九
三三一	是日尼御書		建治三・四・二二	断存	正四四	四〇	四九

二二二	中興政所女房御返事		建治三・四・二二	断存	正四四	三〇	四九
二二三	上野殿御返事		建治三・五・三		正三七	九	四八
二二四	窪尼御前御返事		建治三・五・四	断存	正三三	一〇	四九
二二五	觉性御房御返事		建治三・五・五	完存	正四六	元五	四九
二二六	宝軽法重事		建治三・五・一	完存	正三七	二七	四九
二二七	筍御書		建治三・五・一	完存	正三六	二七	四九
二二八	上野殿御返事		建治三・五・一五	断存	正四四	三〇	四九
二二九	霖雨御書		建治三・五・二二	完存	正三九	二四	四九
二三〇	さじき女房御返事		建治三・五・二五	断存	正三九	九	四九
三三一	下山御消息		建治三年六月	断存	正四七	三三	五〇
三三二	兵衛志殿御返事		建治三・六・一八	完存	正四八	三三	五〇
三三三	頼基陳状		建治三年七月上旬		正四九	三三	五〇
三三四	四条金吾殿御返事		建治三年七月上旬	断存	正五〇	三三	五〇
三三五	上野殿御返事		建治三・七・一六	断存	正五二	三五	五〇
三三六	三論宗御書		建治三年八月初旬	断存	断七 断八 二六 二六	三五 三五	五〇
三三七	神国王御書		建治三・八・二	断存	正三六	八	五〇
三三八	兵衛志殿御返事		建治三・八・二二	完存	正三六	八	五〇
三三九	富木殿御書		建治三・八・三	完存	正三五	三七	五〇
三四〇	四条金吾殿御返事		建治三年八月頃		正三七	三	五〇
三四一	崇峻天皇御書		建治三年初冬頃	曾存	正三六	三	五〇
三四二	庵室修復書		建治三年初冬頃	曾存	正三六	三	五〇
三四三	兵衛志殿女房御返事		建治三・一・七		正三六	三	五〇
三四四	大田殿女房御返事		建治三・一・八		正三五	三	五〇
三四五	兵衛志殿御返事		建治三・一・一〇	断存	正三六	三	五〇
三四六	曾谷次郎入道殿御返事		建治三・一・一八		正三七	三	五〇
三四七	窪尼御前御返事	西山殿後家尼 御前御返事	建治三年末 四年初頭		正四三	二〇	五〇

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
二四八	鼠入鹿事		建治三年	断存	正五二	三六〇	三三
二四九	実相寺御書 四十九院等事		建治四・一・一六		正七二	四三	五〇
二五〇	四条金吾殿御書		建治四・一・二五	曾存	正七三	四四	五〇
二五一	松野殿御返事		建治四・二・二三	断存	正七四	四四	五〇
二五二	現世無間御書		建治四・二・二三	断存	正三九	二九	五九
二五三	三沢抄		建治四・二・二三	模本	正五五	四三	五二
二五四	始開仏乘義		建治四・二・二八	完存	正七七	四四	五〇
二五五	弘安改元事		弘安元年二月上旬	完存	正二九	四〇	五九
二五六	諸人御返事		弘安元・三・二一	完存	正八〇	四九	五九
二五七	立正安国論(広本)		弘安元年三月末 四月初旬頃	完存	正九〇	五九	五九
二五八	上野殿御返事		弘安元・四・一		正八二	四〇	五八
二五九	檀越某御返事		弘安元・四・一	完存	正八三	四〇	五九
二六〇	南条殿御返事		弘安元・四・一四	署名花押	正四九	三〇二	五二
二六一	四条金吾殿御返事		弘安元年四月 五月頃		正三三	三九	五二
二六二	妙法尼御返事	松野殿御返事	弘安元・五・一		正八七	四〇	五〇
二六三	新田殿御書		弘安元・五・二九	曾存	正三六	二五	五五
二六四	兵衛志殿御返事		弘安元年五月頃	断存	正二九	二五	五七
二六五	日女御前御返事		弘安元・六・二五	断存	正五三	二八	五六
二六六	富木入道殿御返事		弘安元・六・二六	完存	正五四	二七	六〇
二六七	中務左衛門尉殿御返事		弘安元・六・二六	完存	正五五	二七	六三
二六八	兵衛志殿御返事		弘安元・六・二六	完存	正五九	二七	六五
二六九	窪尼御前御返事		弘安元・六・二七		正五七	二五	六六
二七〇	妙法尼御前御返事		弘安元・七・三		正五八	二六	六七
二七一	窪尼御前御返事	種種物御消息	弘安元・七・七	断存	正五九	二六	六八
二七二	時光殿御返事		弘安元・七・八		正六〇	二七	六〇

二七三	妙法尼御前御返事		弘安元・七・一四	断存	正三二	一五	五二
二七四	千日尼御前御返事		弘安元・七・二八	完存	正三二	一六	五三
二七五	秀句十勝抄		弘安元年七〇八月	完存	四三	三九	五五
二七六	一代五時鶏園未開寺本		弘安元年七〇八月	完存	四四	三九	五五
二七七	弥源太入道殿御消息		弘安元・八・一一		正三三	一八	五〇
二七八	芋一駄御書		弘安元・八・一四	完存	正三三	一八	五〇
二七九	曾谷殿御返事		弘安元・八・一七	断存	正三九	一六	五二
二八〇	妙法比丘尼御返事		弘安元・九・六		正三九	一六	五二
二八一	兵衛志殿御書		弘安元・九・九	断存	正三九	一七	五九
二八二	四条金吾殿御返事		弘安元・九・一五	曾存	正四〇	一六	五九
二八三	上野殿御返事		弘安元・九・一九		正四〇	一七	五九
二八四	大田入道殿女房御返事	大田殿女房御返事	弘安元・九・二四		正三八	一七	五〇
二八五	本尊問答抄		弘安元年九月		正三七	一五	五五
二八六	上野殿御返事		弘安元・一〇・一一	断存	正三四	一五	五九
二八七	四条金吾殿御返事		弘安元・一〇・二二		正三六	一〇	五九
二八八	兵衛志殿御返事		弘安元・一一・二九	断存	正三八	一六	六〇
二八九	出雲尼御前御書		弘安元・一一・二一	断存	正四〇	三〇二	六〇
二九〇	妙法尼御前御返事		弘安元年未頃		正四三	一〇	六二
二九一	仏説御書		弘安元年	断存	多数	多数	六三
二九二	上野殿御返事		弘安元・一一・三	断存	正三五	一六	六七
二九三	越後公御房御返事		弘安元・一一・八	完存	正四七	二六	六八
二九四	孝子御書		弘安元・一二・二八	断存	正三六	一六	六九
二九五	筵三枚御書		弘安二年三月 四・五日頃	断存	正四〇	一九	六二
二九六	陰徳陽報御書	不孝御書 陰徳陽報御書	弘安元・四・二三	断存	正三三	一五	六三
二九七	西山殿御返事	師子王御書等	弘安元・五・一二	断存	多数	多数	六四
二九八	六識事	五眼六識等事	弘安二年五月頃	完存	四六	二二	六〇

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
二九九	阿耨多王御書		弘安二・五・三三	断存	断三三	二六八	三三
三〇〇	諸経与法華経難易事		弘安二・五・二六	完存	正三六	七五	六四
三〇一	松野殿女房御返事		弘安二・六・二〇	断存	正三六	一五五	六五
三〇二	故阿仏房讚歎御書		弘安二年七月上旬	断存	断三三	一五三	六六
三〇三	孟蘭盆御書		弘安二・七・二三	完存	正三三	一七〇	六七
三〇四	乘明上人御返事		弘安二・七・二七	完存	正三七	一六五	六九
三〇五	上野殿御返事		弘安二・八・八	断存	正三八	一六五	六〇
三〇六	光日尼御返事		弘安二・九・一九	断存	正三八	一七五	六〇
三〇七	大尼御前御返事	大学三郎御書等	弘安二・九・二〇	断存	多数	多数	六三
三〇八	伯耆殿御書		弘安二・九・二〇	断存	正三二	一六七	六三
三〇九	伯耆殿並諸人御中御書		弘安二・九・二六	断存	多数	多数	六七
三一〇	浄行一分御書		弘安二年九月下旬	断存	断	断	六四
三一一	大音声御書		弘安二年九月下旬	断存	断	断	六四
三一二	富木入道殿御返事		弘安二・一〇・一	完存	正三〇	一六八	六二
三二三	聖人御難事		弘安二・一〇・一	完存	正三三	一六五	六四
三三四	伯耆殿御返事		弘安二・一〇・二二	完存	正三三	一六八	六四
三三五	滝泉寺大衆日秀日弁等陳状草案	滝泉寺申状	弘安二・一〇・二二	共存	正三三	一六七	六四
三三六	変毒為菜御書		弘安二・一〇・二七	断存	正三六	一六三	六四
三三七	故三位房御書		弘安二年一〇月頃	断存	断	断	六五
三三八	兩人御中御書		弘安二・一〇・二〇	完存	正三五	一八二	六五
三三九	上野殿御返事		弘安二・一一・一六	完存	正三五	一七〇	六五
三三〇	治部殿御返事		弘安二・一一・一六	署名花押	断	断	六五
三三一	中興入道御消息		弘安二・一一・三〇	完存	正三五	一七二	六五
三三二	上野殿御返事		弘安二・一二・二七	完存	正三五	一七三	六五
三三三	窪尼御前御返事		弘安二・一二・二七	完存	正四〇	一八九	六五

三三四	五大のもとへ御書		弘安二年頃	断存	断七	一五〇	六七
三三五	事理供養御書		弘安二年	断存	正三〇	一三二	六九
三三六	上野殿御返事		弘安三・一・三三	断存	正三九	一七九	六〇
三三七	秋元御書		弘安三・一・二七	断存	正三〇	一七九	六一
三三八	慈覚大師事		弘安三・一・二七	完存	正六一	一四二	六一
三三九	南条平七郎殿御返事		弘安三年一月頃	曾存	断	断	六四
三三〇	日眼女釈迦仏供養事		弘安三年二月	曾存	正三七	一六三	六七
三三一	大井莊司入道御書		弘安三・二・二二	断存	正〇八	一四〇	六〇
三三二	日住禅門御返事		弘安三・三・三三	断存	正〇二	一四〇	六一
三三三	おけ・ひさぐ御消息	おけ・ひさぐ御消息	弘安三・四・六	完存	正〇二	一四〇	六一
三三四	かわいどの御返事		弘安三・四・一九	断存	正〇二	一四〇	六一
三三五	新池殿御消息		弘安三・五・二二	断存	正三三	一六九	六五
三三六	窪尼御前御返事		弘安三・五・三	断存	正三八	一五三	六六
三三七	窪尼御前御返事		弘安三・六・二七	断存	正六九	一五九	六九
三三八	大田殿女房御返事		弘安三・七・二二	完存	正七〇	一五〇	六〇
三三九	千日尼御返事		弘安三・七・二二	完存	正七〇	一五九	六二
三四〇	上野殿御返事		弘安三・七・二二	断存	正七二	一六六	六三
三四一	浄藏浄眼御消息		弘安三・七・七	断存	正七三	一六八	六四
三四二	上野殿御返事		弘安三・八・八	断存	正三三	一四〇	六六
三四三	上野殿御返事		弘安三・八・二六	断存	正七七	一五九	六七
三四四	松野殿女房御返事		弘安三・九・一	断存	正三六	一五二	六七
三四五	上野殿御返事	上野殿後家尼御前御書	弘安三・九・一七	断存	正七九	一五九	六八
三四六	弥源太入道殿御返事		弘安三・九・一七	断存	正三五	一五三	六九
三四七	南条殿御返事		弘安三年九月中旬 一〇月上旬	断存	正三〇	一七四	六一
三四八	四条金吾殿御返事		弘安三・一〇・八	断存	正八四	一七九	六一
三四九	刑部左衛門尉殿御返事	刑部左衛門尉女房御返事	弘安三・一〇・二二	断存	正六六	一八三	六一

番号	書名	旧名(定遺)	系年	真蹟	定番	定頁	頁
三五〇	初穂御書		弘安三・一〇・二一	断存	正三二	一五二	六五
三五一	上野殿母尼御前御返事		弘安三・一〇・二四	断存	正三八	一八〇	六六
三五二	中務左衛門尉殿御書		弘安三・一〇・二九	曾存			六七
三五三	上野尼御前御返事		弘安三・一一・一五	断存	正四五	一八〇	六九
三五四	富城入道殿御返事		弘安三・一一・二五	完存	正五二	二七〇	七〇
三五五	富城殿女房尼御前御書		弘安三・一一・二五	完存	正五二	二七〇	七一
三五六	兵衛志殿女房御返事		弘安三・一一・二五	完存	正五二	二七二	七二
三五七	大夫志殿御返事		弘安三・一一・二五	断存	正五二	一八〇	七三
三五八	日敵尼御前御返事		弘安三・一一・二九		正五二	一八九	七四
三五九	大豆御書		弘安三・一二・二三	曾存	正五七	一八〇	七六
三六〇	南条殿御返事		弘安三・一二・五頃	断存	多数	多数	七〇
三六一	四条金吾許御文		弘安三・一二・一八		正五二	一八二	七三
三六二	智妙房御返事		弘安三・一二・一八	完存	正五三	一八六	七四
三六三	上野殿御返事		弘安三・一二・二七		正五三	一八六	七五
三六四	窪尼御前御返事		弘安三・一二・二七		正五三	一七〇	七七
三六五	ほりの内殿御返事	十字御書	弘安三・一二・二八	完存	正五四	一六〇	七八
三六六	異体同心事		弘安三年二月頃		正五五	一八〇	七〇
三六七	諫曉八幡抄		弘安三年二月末	断存	正五五	一八三	七三
三六八	十月分時料御書		弘安三年	断存	正五九	一八〇	七六
三六九	重須殿女房御返事		弘安四・一・一五	完存	正五九	一八〇	七九
三七〇	上野尼御前御返事		弘安四・一・二三	完存	正四〇	一八七	七〇
三七一	春初御消息		弘安四・一・二〇		正四六	一九〇	七三
三七二	松野尼御前御返事		弘安四・一・二一	断存	正三七	一八〇	七四
三七三	上野殿御返事		弘安四・三・一八		正四二	一八一	七四
三七四	松野殿後家尼御前御返事		弘安四・三・二六		正三九	一六七	七五

三七五	富城入道殿御返事		弘安四・四・一〇	完存	正三六	一〇七	七六
三七六	大風御書		弘安四年五月初旬	断存	正四四	一六六	七六
三七七	八幡宮造営事		弘安四・五・二六		正四五	一六七	七九
三七八	齡六旬御書	阿仏房御返事	弘安四・六・三		正五二	一七八	七〇
三七九	人々御中御書	小蒙古御書	弘安四・六・一六		正四七	一七五	七三
三八〇	御所御返事		弘安四・七・二七	断存	正四三	一七三	七三
三八一	曾谷二郎入道殿御報		弘安四・閏七・一		正四八	一八七	七五
三八二	光日上人御返事		弘安四・八・八	曾存	正四九	一七六	七六
三八三	治部房御返事		弘安四・八・二三		正四〇	一八〇	七六
三八四	上野殿御返事		弘安四・九・二〇		正四二	一八五	七九
三八五	大夫志殿御返事		弘安四・一〇・一		正四九	一九九	七五〇
三八六	富城入道殿御返事 老病御書	花押	弘安四・一〇・三	完存	正四三	一八六	七五
三八七	地引御書		弘安四・一一・二五	曾存	正四七	一八九	七五
三八八	富木殿御返事		弘安四・一一・二九	完存	正四六	一八〇	七五
三八九	上野殿母尼御前御返事		弘安四・一二・八	完存	正四八	一八六	七五
三九〇	四条金吾殿御返事		弘安五・一・七	断存	正四四	一八六	七六
三九一	上野郷主等御返事		弘安五・一・二一	曾存	正三六	一六三	七五
三九二	内記左近入道殿御返事		弘安五・一・一四	完存	正四五	一七五	七六
三九三	春の始御書		弘安五年一月	曾存	正四七	一七九	七六
三九四	棧敷女房御返事		弘安五・二・一七	完存	正四二	一六〇	七三
三九五	伯耆公御房御消息		弘安五・二・二五		正四六	一七九	七三
三九六	法華証明抄		弘安五・二・二八	断存	正四九	一九〇	七四
三九七	稲河入道殿御返事		弘安五・三・二一	断存	正四六	一八〇	七五
三九八	波木井殿御報		弘安五・九・一九		正四三	一八四	七六

◎第Ⅱ類 真偽未決遺文目次

番号	書名	旧名(定遺)	系年	写本	定番	定頁	頁
一	蓮盛抄		文永五、六年頃	滿外	正四	一七	七一
二	諸宗問答抄		文永七年頃	日代本	正五	三	七五
三	主師親御書		文永四、五年頃	滿外	正八	四	七五
四	一念三千理事		文永六年頃	日朝本	正二	五	七六
五	爾前得道有無御書		文永六年頃	平賀本	正八	一〇	七六
六	二乗作仏事		文永九年頃	日朝本	正九	一五	七六
七	同一鹹味御書		弘長元年	日朝本	正七	一三	七六
八	四恩抄		弘長二・一・一五	日朝本	正六	一三	七六
九	教機時国抄		文永七、九年頃	平賀本	正元	一四	七六
一〇	六郎恒長御消息		文永元年九月	滿外	正六	一四	七六
一一	南部六郎殿御書		文永八・五・一六	縮刷	正八	一七	七六
一二	四条金吾殿御書		文永八・七・一二	三宝外	正八	一五	七六
一三	四条金吾殿御消息		文永八・九・二一	日朝本	正八	一五	七六
一四	土籠御書		文永八・一〇・九	日朝本	正九	一五	七六
一五	佐渡御勘気抄		文永八年一〇月	滿外	正九	一五	七六
一六	四条金吾殿御返事		年不明三月六日	他受用	正六	一五	七六
一七	西山殿御返事		建治二年	他受用	正三	一五	七六
一八	松野殿御消息		建治二年頃	滿外	正三	一七	七六
一九	千日尼御前御返事		弘安元・四・一〇・一九	日朝本	正三	一五	七六
二〇	一大事御書		弘安二・五・一三	平賀本	正三	一五	七六
二一	妙一尼御前御返事		年不明五月一日	日健本	正三	一六	七六
二二	内房女房御返事		弘安三・八・一四	滿外	正三	一六	七六
二三	上野殿御書		系年不明	刊外	正三	一六	七六

二四	師子類王抄		系年不明	日健本	統三	一五	一五
二五	堯舜禹王抄		系年不明	三宝外	統四	一五	一五
二六	諸願成就抄		系年不明	刊外	統五	一五	一五
二七	問答抄		系年不明	滿外	統八	一〇	一五
二八	十一因縁御書		建長五年前後	日朝本	統〇	一〇	一五
二九	禅宗天台勝劣抄		文永六年頃	刊外	統〇	一〇	一五
三〇	三沢御房御返事		系年不明	遺録	統一	一〇	一五

◎第三類 偽撰遺文目次

番号	書名	旧名(定連)	系年	写本	定番	定頁	頁
一	立正観抄		年不明二月二八日	日進本	正二五	八〇	八〇
二	立正観抄送状		年不明二月二八日	日進本	正二五	八七	八七
三	当体義抄		文永一〇年頃	日朝本	正二四	七五	八八
四	当体義抄送状		文永一〇年頃	滿外	正二五	七八	八三
五	生死一大事血脈抄		文永九・二・二一	日朝本	正二五	五三	八三
六	草木成仏口決		文永九・二・二〇	日健本	正九七	五三	八三
七	最蓮房御返事		文永九・四・二三	日朝本	正二〇二	六〇	八七
八	得受職人功德法門抄		文永九・四・二五	日朝本	正二〇三	六五	八八
九	末法一乘行者息災延命所願成就祈禱經文		文永一〇・二・二八	縮刷	統五	三〇七	八八
一〇	祈禱經送状		文永一〇・二・二八	日朝本	正二五	六八	八三
一一	諸法実相抄		文永一〇・五・一七	日朝本	正三三	七三	八〇
一二	本寺参詣抄		弘安五九・二・二一	日現本	統四六	三七	八七
一三	当体蓮華抄		弘安三二・八・一	日朝本	統元	三二	八八
一四	十八円満抄		弘安三二・一・三	滿外	統四〇	三七	八四
一五	臨終一心三観		文永一〇・二・二五	日親本	統五	三〇五	八五
一六	日女御前御返事		建治三二・八・三三	日朝本	正二五	三七	八〇
一七	四条金吾殿御返事		文永九・五・二	日朝本	正二五	三六	八〇
一八	法華真言勝劣事		文永元七・九	金網集	正二六	三六	八〇
一九	新池御書		弘安三年二月	滿外	統七	三八	八五
二〇	真言見聞		文永九年	日朝本	正二〇	三六	八五
二一	真言天台勝劣事		系年不明	日朝本	正七	三七	八五
二二	真言七重勝劣		系年不明	日朝本	正二六	三三	八六

二二	日本真言宗事		系年不明	滿外	四二	三六	八三
二四	本門戒体抄		系年不明	日朝本	正三六	一七三	八五
二五	念仏無間地獄抄		系年不明	滿外	正六	一四	八六
二六	法華初心成仏抄		系年不明	日朝本	正二七	一四三	八五
二七	聖愚問答抄		系年不明	日健本	正四三	一〇〇	八六
二八	法華大綱抄		系年不明	日朝本	統二	一〇九	八八
二九	十王讚歎抄		系年不明	三宝外	統六	一六六	八九
三〇	回向功德抄		系年不明	日朝本	正九	五	八八
三一	一代五時繼図		系年不明	三宝外	四九	二四七	八八
三二	女人成仏抄		文永初期	日朝本	正四〇	三三	八三
三三	神祇門		建長八年	日朝本	統三	二〇六	八三
三四	垂迹法門		系年不明	日朝本	統九	二〇五	八五
三五	釈迦一代五時繼図		系年不明	三宝外	四〇	一〇六	八六
三六	法華經大意		系年不明	滿外	統二	二〇二	八七
三七	三種教相(広本)		系年不明	三宝外	四四	三三	八八
三八	如説修行抄		文永一〇年五月	平賀本	正二四	三三	八八
三九	法華本門宗要抄		弘安五年七月	録抄覺寺	統四	三五	八四
四〇	阿仏房尼御前御返事		建治二九・三	日朝本	正二四	二〇	八九
四一	上野殿御返事		年不明四・一〇	日朝本	正三〇	二六	八九
四二	教行証御書		弘安四・三・二	日朝本	正二八	二九	九二
四三	波木井殿御書		弘安五・一〇・七	日朝本	正四四	一九	九三
四四	今此三界合文		系年不明	日朝本	四〇	三六	九五
四五	三世諸仏總勸文教相庭立		弘安二年一〇月	平賀本	正四六	二六	九六

番号	書名	旧名(定遺)	系年	写本	定番	定頁	頁
七〇	此経難持十三箇秘決		文永八・一〇・一〇	統集	統三四	二六八	九七四
六九	善神擁護抄		系年不明	他受用	統一五	二四二	九七四
六八	大田左衛門尉御返事		年不明四月二三日	日朝本	正二八五	四九五	九七三
六七	成仏法華肝心口伝身造抄		建治元・一一・二三	日朝本	統三三	三〇四	九七一
六六	無作三身口伝抄		系年不明	日朝本	統三三	三二一	九七〇
六五	四菩薩造立抄		弘安二・五(六)・一七	日健本	正三三五	一六七	九六八
六四	観心本尊抄分科	観心本尊抄文科	系年不明	日隆本	統七	二〇九五	九六七
六三	観心本尊得意抄		弘安元・一一・二三	日隆本	正一九九	二二九	九六三
六二	法華宗内証仏法血脉		文永一〇・二・二五	日朝本	正二六	一九一	九六一
六一	大黒天神御書		弘安二・四・一〇	三宝外	統三五	三三五	九五九
六〇	大黒送状		年不明三月二三日	滴外	統七	二〇二	九五九
五九	大黒天神相伝肝文		年不明三月二三日	三宝外	統六	二〇二	九五七
五八	聖人御系函御書		文永元・八・二四	日境録外	統八	二〇五	九五七
五七	富木入道殿御返事		文永八・一一・二三	智本本	正九三	五六	九五五
五六	義浄房御書		文永一〇・五・二八	日朝本	正三三	七〇	九五五
五五	三大秘法稟承事		弘安四(五)・四八	所持本	正四〇三	八六二	九五七
五四	撰法華経付属御書		弘安五・一・二九	日叶本	統三	三三	九五五
五三	大白牛車御消息		系年不明	日健本	正四二	一九〇	九五五
五二	阿仏房御書		建治二・三・二三	日朝本	正〇九	二〇四	九五五
五一	授職灌頂口伝抄		文永一・二・二五	日朝本	正四一	八〇〇	九五五
四九	誦誦法華用心抄		系年不明	日健本	正三	六	九五九
四八	一念三千法門		系年不明	三宝外	統四	二〇三	九五九
四七	万法一如抄		系年不明	三宝外	統五	二〇六	九五九
四六	十如是事		系年不明	日朝本	統三	二〇〇	九五三

七二	十法界事		系年不明	日朝本	正六	三七	九五
七一	四条金吾女房御書		文永八・五・七	日朝本	正大	四四	九五
七〇	三月満御前御書		文永八・五・八	他受用	正九	四四	九五
六九	四条金吾殿御返事		年不明七月二三日	他受用	正八	二〇三	九五
六八	上野殿後家尼御返事		年不明七月二日	日朝本	正三	三六	九五
六七	上野殿御消息		系年不明	滴外	正〇二	二二四	九五
六六	彼岸抄		弘安五・一・二六	日朝本	統四	三三	九五
六五	七上野五郎左衛門尉殿御書		弘安五・八・一一	日朝本	統四	三六	九五
六四	七上野五郎左衛門尉殿御書		弘安四・九・一一	日朝本	正四一	一八三	九五
六三	八〇曾谷殿御返事		建治二・八・二	日朝本	正三六	二五	九五
六二	八一椎地四郎殿御書		年不明四月二八日	日朝本	正五	三七	九五
六一	八二一生成仏抄		系年不明	日朝本	正七	四	九五
六〇	八三妙一女御返事		弘安三・七・二四	日朝本	正三五	一七七	九五
五九	八四妙一女御返事		弘安三・一〇・五	平賀本	正三三	一七六	九五
五八	八五松野後家尼御前御消息		系年不明	滴外	統六	三三	九五
五七	八六弥源大殿御返事		文永一・二・二二	日朝本	正四	八五	九五
五六	八七持妙法華問答抄		系年不明	日朝本	正三	一七四	九五
五五	八八無常遷滅抄		系年不明	日朝本	統四	一七四	九五
五四	八九華果成就御書		弘安元年四月	日朝本	正六	一五〇	九五
四三	九〇出家功德御書		系年不明	刊外	統六	三三	九五
四二	九一曾谷殿御返事		文永七・一・一五	日朝本	統三	二二六	九五
四一	九二秋元殿御返事		文永八・一・一一	三宝外	正四	四四	九五
四〇	九三四条金吾殿御返事		年不明一〇・二三	日健本	正四七	一六四	一〇〇
三九	九四与北条時宗書		文永五・一〇・一一	滴外	正五	四二	一〇〇
三八	九五与宿屋入道書		文永五・一〇・一一	滴外	正五	四七	一〇〇
三七	九六与平左衛門尉頼綱書		文永五・一〇・一一	滴外	正五	四六	一〇〇

番号	書名	旧名(定遺)	系年	写本	定番	定頁	頁
九七	与北条弥源太書		文永五・一〇・一一	滿外	正五	四五	一〇六
九八	与建長寺道隆書		文永五・一〇・一一	滿外	正五	四〇	一〇七
九九	与極楽寺良觀書		文永五・一〇・一一	滿外	正五	四〇	一〇七
一〇〇	与大仏殿別当書		文永五・一〇・一一	滿外	正五	四〇	一〇七
一〇一	与寿福寺書		文永五・一〇・一一	滿外	正五	四〇	一〇七
一〇二	与浄光明寺書		文永五・一〇・一一	滿外	正六	四〇	一〇九
一〇三	与多宝寺書		文永五・一〇・一一	滿外	正六	四〇	一〇九
一〇四	与長楽寺書		文永五・一〇・一一	滿外	正六	四〇	一〇九
一〇五	弟子檀那中御書		文永五・一〇・一一	滿外	正六	四〇	一〇九
一〇六	船守弥三郎許御書		弘長元・六・二七	日健本	正三	三三	一〇二
一〇七	弥三郎殿御返事		佐渡流罪直後頃	滿外	正五	三六	一〇三
一〇八	放光授職灌頂口伝	放光授職灌頂下	系年不明	品類御書	統六	二〇九	一〇五
一〇九	四条金吾殿御返事		建治二・六・二七	日健本	正三	二八	一〇九
一一〇	四条金吾殿御返事		系年不明	統集	正五	三六	一〇〇
一一一	経王御前御書		文永九年頃	滿外	正四	六六	一〇二
一一二	経王殿御返事		文永一〇・八・一五	他受用	正二	七五	一〇三
一一三	寂日房御書		弘安二・九・一六	他受用	正四	六六	一〇三
一一四	右衛門大夫殿御返事		弘安二・二・二三	日健本	正五	七九	一〇五
一一五	大白牛車書		系年不明	他受用	正六	四二	一〇六
一一六	大黒天神供養相承事		文永元・九・一七	遺録	統九	二〇	一〇六
一一七	寿量品得意抄		系年不明	滿外	統三	二〇	一〇六
一一八	行者仏天守護抄		系年不明	滿外	正三	二〇	一〇六
一一九	上行菩薩結要付属口伝		系年不明	滿外	正三	二〇	一〇六
一二〇	曾谷入道殿御返事		文永二二年三月	日朝本	正七	九三	一〇三
一二一	松野殿御返事		建治三・九・九	三宝外	正六	二六	一〇四

一二二	同地獄御書		弘安五・九・一一	日隆本			一〇四
一二三	小八幡抄		系年不明	日朝本			一〇六
一二四	八大地獄抄		系年不明	三宝外	統七	九	一〇六
一二五	遠藤左衛門尉御書		文永一・三・二二	遺録	統二	三〇	一〇六
一二六	与平内左衛門書		文永一・二・二八	遺録	統〇	三〇	一〇六
一二七	鎌雀問答		文永二・二・一五	日朝本			一〇六

《偽筆遺文》

一二八	兵衛志殿御返事		建治三・一・二二		統四	三	一〇三
一二九	さだしげ殿御返事		年不明二・二〇		正三	三五	一〇四

《口伝・相伝類》

一三〇	日蓮一期弘法付属書 身延山付属書		弘安五年九月日三	日叶本	統九	三	一〇四
一三一	日朗御讓状		弘安五・一〇・三	刊外	統五	三	一〇四
一三二	御義口伝		弘安元年一・一	日健本 大石寺本	講二	三九七	一〇五
一三三	御講聞書		弘安元年三月	日增本	講一	二〇	一〇五
一三四	法華本門宗血脉相承事		弘安五・一〇・一一	日辰本			一〇三
一三五	具勝本種正法実義 本迹勝劣正伝		弘安三・一・一一	日山本			一〇九
一三六	産湯相承事		弘安五・一〇・八	日教本			一〇六
一三七	御本尊七箇之相承		弘安五・一〇・一〇	日山本			一〇六
一三八	教化弘教七箇口決大事		弘安五年一〇月頃	日山本			一〇七
一三九	上行所伝三大秘法口決		系年不明	日悦本			一〇六

《門下作成文書・後日蓮遺文化》

番号	書名	旧名(定遺)	系年	写本	定番	定頁	頁
一四〇	祈祷經言上			滿外	統六	二〇五	二〇六
一四一	身延山御書			平賀本	正四三	一九五	二〇一
一四二	真言宗私見聞			日健本	統五	二〇七	二〇三
一四三	早勝問答			三宝外	統三	二〇六	二〇五
一四四	法華和讃			三宝外	統七	二〇六	二〇六
一四五	寿量品文底大事			日我本			二〇七